九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

名家書簡披展 : 連載その六

雅俗の会

https://doi.org/10.15017/4741915

出版情報：雅俗. 6, pp.303-338, 1999-01-20. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

名家書簡披展

連載　その六

雅俗の会

本号は中野三敏氏御所蔵の蒔田必器宛書簡約百通のうち、先ず十七通を掲載する。原簡は名古屋の古書肆飯島書店より一括して購入されたとのことで、その他、出所などの経路は不明とのことである。各書簡は装訂されずに、原状のかたちで保存されている。掲載するに当たっては、差出人の署名のあるもののみを選び、便宜上一～十七の番号を付した。その他の書簡は次号以下に掲載する予定である。

蒔田必器は伊勢の書家で、必器はその字、名は器、通称喜兵衛、亀六、号暢斎、金陵、彪山、鴻雁堂など。その事蹟は未だ十分に明らかにされておらず、殆ど唯一の必器の伝と言ってよい三村竹清「田必器」（「伝記」四ノ六　昭和十二年六月、のち日本書誌学大系23『三村竹清集』四「近世能書伝」に再録）には、伊勢神宮祠官竜氏に御師として仕えて江戸京都を奔走、その職務柄、文人名家との付き合いも広いとし、高芙蓉などとの交際を指摘する。

沢田東江の『来禽堂法帖』（安永八年序刊）に就けば、東江門人として必器の名が見えており、即ち明和六年版『古今諸家人物誌』に言うように、書は所謂「古法書」なる書学を提唱して、宝暦以降書家としての名声を馳せた東江に学んだことが確認される。一説に河崎南皋門とも伝えるが（『宇治山田市史』）、これは伊勢における師弟関係と見做すべきであろう。古今の書跡を考究して、編著としては『集古妙蹟』（八巻補遺一巻五冊、享和三年序、文化五年刊）などが知られる。また諸葛監に南蘋

流を学んで画にも長じた。

伝記が曖昧たる域を出ない必器であるが、安永・天明期以降の伊勢を中心とする文化圏の中核に位置する人物であることは間違いないであろう。本号に掲載する書簡からは、杉田玄白、安達清河などとの交誼も確認され、本号以下の掲載が逆に従来の必器伝の不明瞭さをいくばくかでも補い得る材料になると思われる。

書簡翻字の方針は、本誌創刊号の凡例に従った。尚、封筒あるいは端裏等に、宛名・署名のある場合には、本文に先立って（封）・（端裏）として翻字した。また差出人の多くは必器周辺に在る伊勢ゆかりの人物であろうが、闡明し得ない場合が多い。識者の示教を俟ちたいと思う。

（大庭　卓也）

一　西村四郎右衛門

（封）山田妙見町[1]小田橋[2]ヨリ南江入　西村四郎右衛門[3]

蒔田亀六様

用書　菜ノ種添　相可[4]ヨリ発

九月十三日　夜封ス

任幸便啓上仕候。此間者遠路之處御来臨御揮毫被成下千万忝奉存候。則今日ヨリ石工彫リ初メ申候。[5]誠ニ両三日敝盧御滞留何角御不自由御入可被成、殊ニ何之風情も無御座御残多無申計奉存候。何卒来春花之時節御催し御来臨奉待候。早速御礼参上も可仕筈ニ御坐候得共彼是世事ニ被役不能其義、因幸便乍乱毫先ツ御礼申上度如斯御座候。御両君様へも可然様被仰上被下度奉頼上候。餘ハ近内奉期拝顔万々可申上候。恐惶頓首

九月十三日　西村四郎右衛門

蒔田亀六様

註1　寛政三年、伊勢外宮の門前町である山田町の一町となる（『角川日本地名大辞典　三重県』）。

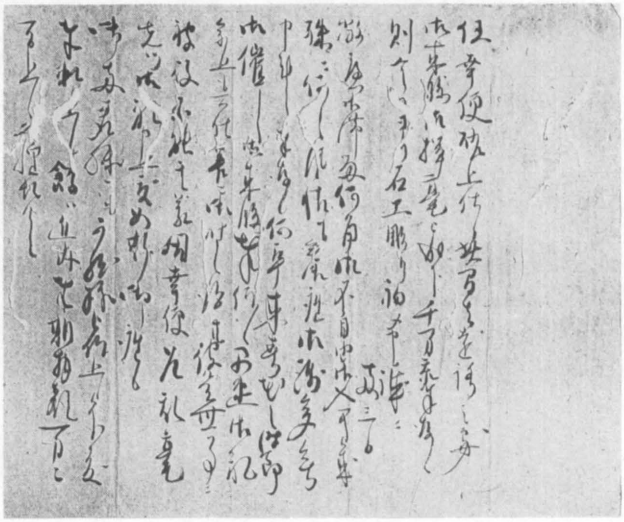
2　勢田川に架かる橋。参宮街道が通る（同右）。

3　伊勢商人。名広孝。四郎右衛門は当主代々の通称。延享四年生、文化十二年八月二十日没、六十九歳。相可で呉服商、紙問屋、為替方を営んでいた豪商大和屋本家西村三郎右衛門

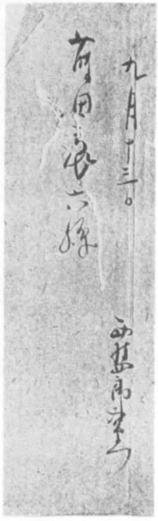
の分家、大和屋四郎右衛門家の四代目当主（『多気町史』）。

4　四郎右衛門家の屋敷跡は上相可字町屋一八九番地にあるという（同右）。

5　書簡二より十月二十九日に完成したか。



（193×286mm）



二　西村四郎右衛門

（端裏）蒔田亀六様　　西村四郎右衛門

一書奉呈。寒冷御坐候得共、御起居いかゝ被成御坐哉。御安否御床敷、去ル頃[1]より御禮参上可仕心懸申候得共、多事前後見合候而者出兼、漸ク去ル廿五日伺公仕候處、折節御癪氣被成御坐御様子、依而御勝手江申上置帰宅仕候。失敬之段者何分御用捨被成下度、右御禮申上度乍軽微

金壱封参百也

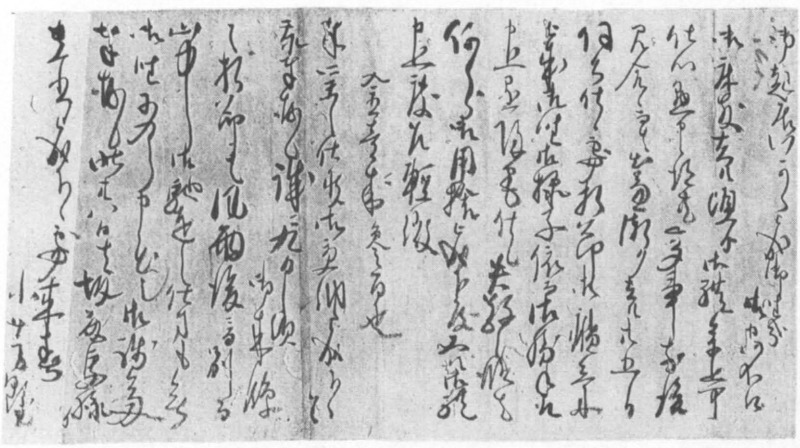
奉呈仕候。御受納被成下候ハヽ忝奉存候。誠ニ九日頃御来臨之折節も風雨後ニ而、別而山中御馳走之仕方も無御坐、爾今申出シ御残多奉存候。昨廿八日者坂藤馬[2]様より

貴書被成下候處、来春小芳野花之時節御来臨も可被為在と被仰下候。何分其節者御同伴御光来被下候ハヽ、品ニ寄リ下拙も御供仕可申候。但し多事之義ニ御坐候故、決而と申義ハ申上兼候。小芳野より初瀬ナドへ罷越候ハヽ、能キ鬱散ニ可有御坐と奉存候。碑之義も出来仕申候。未ダ得与建テ申候義ニ而者無御坐候。見合せ相立テ可申と奉存候。猶来月中又〻見合せ参上前ニ可申上候。先者御禮申上度趣、任幸便乍乱毫如斯御座候。恐惶頓首

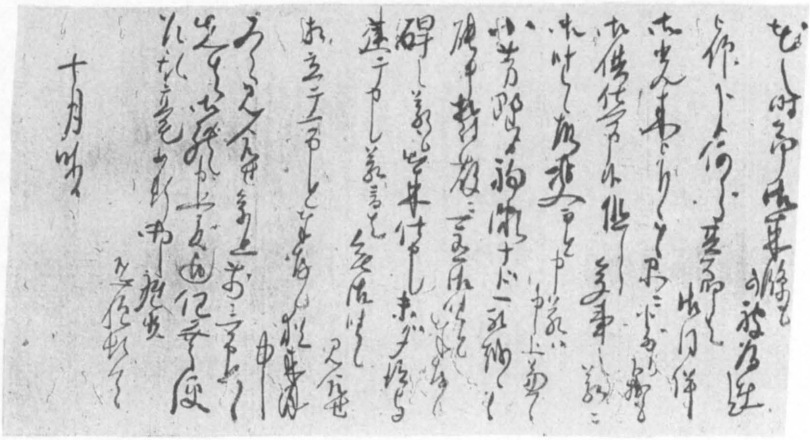
十月晦日

註1　書簡一より、九月半ば頃を指すか。

2　内宮権禰宜、正四位上に至る。八日市場の人。名紹明、字明卿、号柳園。喜多之丞・氏明と称す。藤馬は通称。元文四年二月二十七日生、文化九年十月八日没、七十四歳（『度会人物誌』）。



（161×640mm）

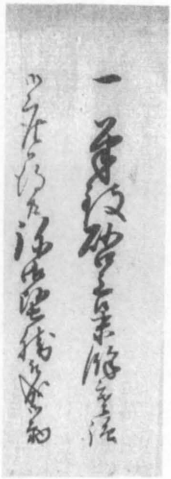


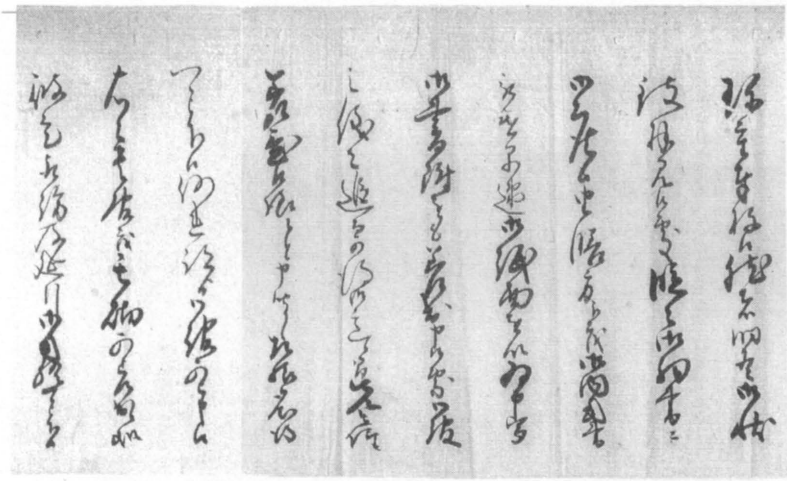
三　山中弥七・市原藤七

一筆致啓上候。未餘寒強御座候得共、弥御堅勝被成御勤、珍重奉存候。然者旧冬御状致拝見候處、段々御細書ニ御座候由、膳方江も御内用書被遣、早速御紙面を以為申聞、御書附をも差出申候處、御報之儀者追而可得御意候間、先其儘差置候様にと申聞候。左様御心得可被下候。何れ跡より御報可被申候。右者貴報も其砌可差出候処、彼是取紛及延引、御用捨可被下候。猶追々可得貴意候。御安否承知仕度、御報旁如此御座候。恐惶謹言

正月廿日　　山中弥七
　　市原藤七

蒔田喜兵衛様





（178×623mm）

四　鴎将

幸便御座候間、一簡奉呈候。増々軽寒相催候得共、愈御清安珍重之御事奉存候。随而小生不相変罷有、大慶仕候。且当夏中、雲箋之贈、殊ニ蒔田兄より御傳聲、千萬忝奉存候。其後不渡一報、失礼之段、御高免被下度奉存候。野生事京着以来、村瀬掃部[1]申師家へ寄宿仕候。若長兄等

御上京被成候ハヽ、必御立寄被下度奉存候。宅者烏丸通三條上ル所東側ニ御座候。明年者何卒参宮仕度心懸居候。急書故、早々申上候。餘者後便ト萬縷申残候。頓首

陽将[2]以拝

十月廿一日

呈

畑井兄[3]

蒔田兄

文机下

二白蒔田君へ申上候。東都ニても御咄承知仕候所、中川長四郎様[4]御心ヤシキ由、何卒中川兄之書、拝受仕度奉存候。外ニ可相頼所も無之候。藤紙一枚へ三行位、半切へ二行位、細紙へ一二枚為御書被下度、偏奉希候。尚公之御書も四五枚拝領被仰付被下度奉希。此事者乍御面倒、無御失念偏ニ奉頼上候。

一、急段故、外者書状も不差上候間、福地氏、平賀理衛門殿へ能々御傳言被下度希候。且師家之集進上仕候間、御覧可被成候。書生之身分故、萬事物不自由、差上候品も無之、御高免被下度候。乍操事前書之事者奉頼上候。早々略候。頓首

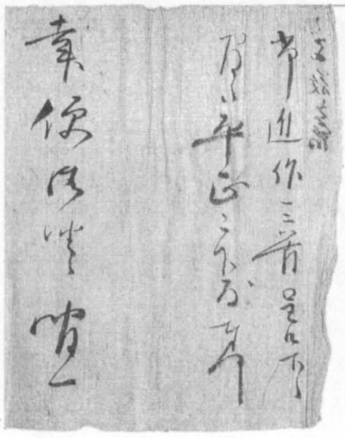
尚々近作一二首呈几下候間、御平正被下度奉存候。

註1　村瀬栲亭。儒者。名之熙、字君績、通称掃部・嘉右衛門、号小華陽・神州等。土岐中書とも称す。延享三年生、文政元年十二月六日没、七十三歳。

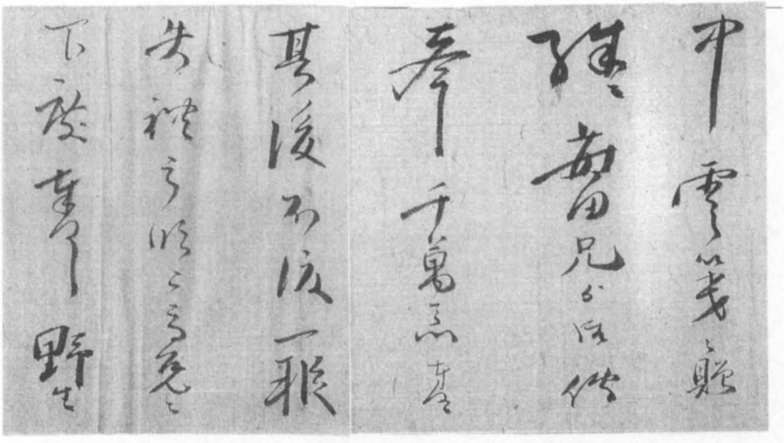
2　不詳。但し端裏には「子敬書翰」とある。

3　畑井旅麿。国学者。名正英。必器の兄。享保十四年生、寛政二年十二月四日没、六十二歳。

4　中川天寿。書家。通称長四郎、名天寿、号醉晋斎・三岳等。書を松下烏石に学ぶ。享保十四年生、寛政七年没、六十九歳。

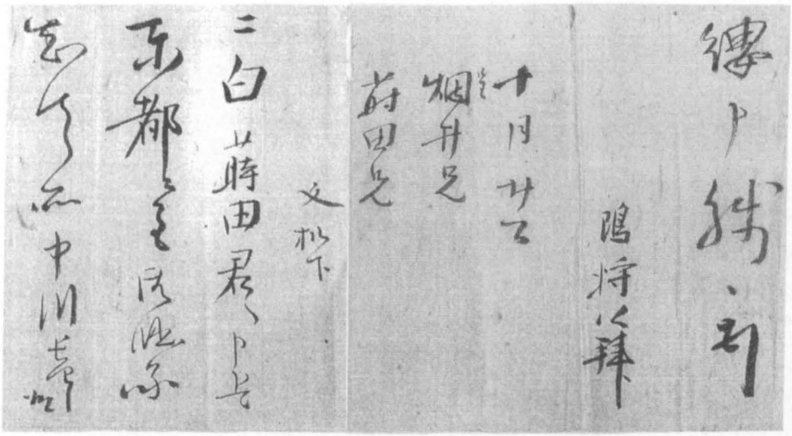


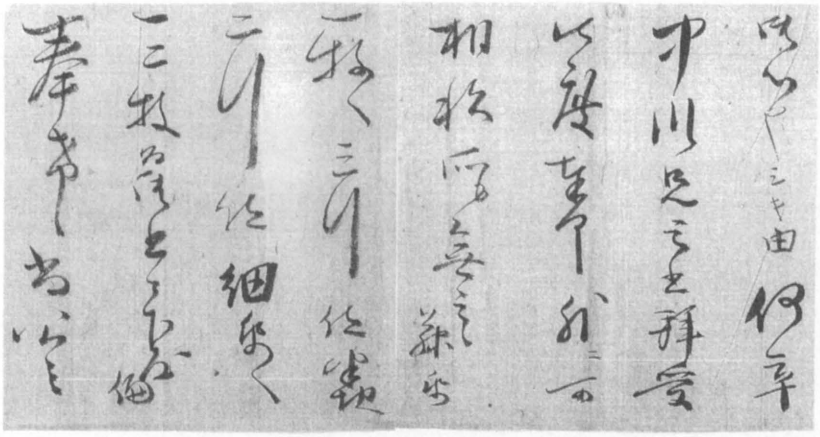
（160×2626mm）

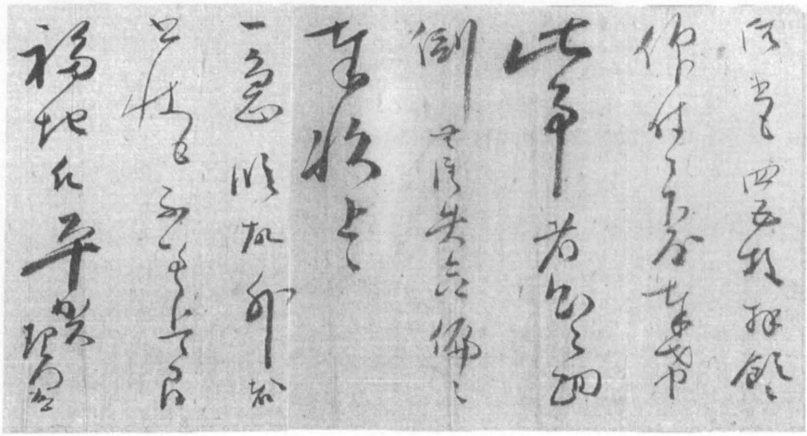


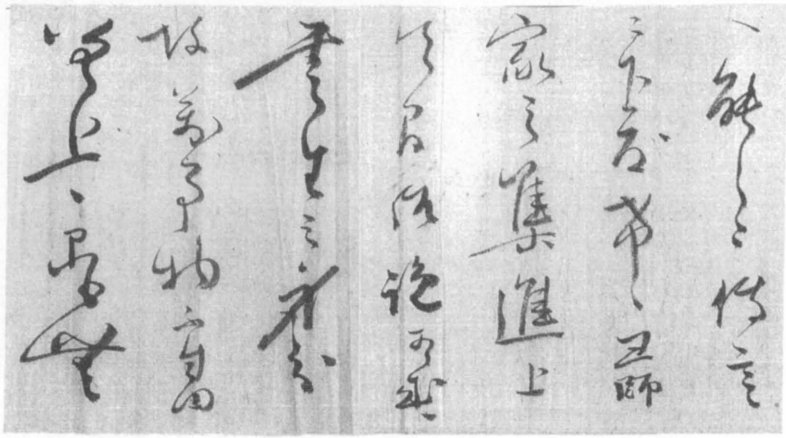
事京兵隊
村脇伊部卜
師家、寄病ヲ
兵長之等ハ
上京シテ必
ヤ三家ヲ殺害
宅者烏也遂ニ

除上ル所
京俗
明年ノ
事京宅
宅ヲ殺
ヤ捕ヘ急ニ
故早ク
餘ハ後便ニ









五　佐藤意仲

一書呈上仕候。先以新春之佳色目出度申納候。残寒未謝候處、先生愈御安恭可被成御迎陽、欣躍之到ニ奉存候。小子依舊犬歯相加申候。乍憚御懸念被下間布候。且去冬中は時下不相應之冬温にて極月中旬迄二月中旬頃之様ニて梅花も發候かと頼居候所、急ニ厳寒ニ罷成、毎日之雨雪ニ御坐候所、年明候て冬暖ニ罷成候所、過ル十一日より残寒甚布、時々風雪も有之、旧臘ニ倍候寒氣漸此両三日、春暖相催候得共、兼而御地邊とハ相ちかひ春寒乃除兼候土地ニ御坐候得は、中々近日ニは梅花なと發候事はおもひもよらさる事ニ御坐候。其御地邊は兼て温暖之土地ニ御坐候間、今程は梅花も散しまひ候半と想像仕候。京師へも時々可被成御越羨應此事ニ奉存候。

一、去七月五日当國十五濱小室[1]と申所へ廣東人漂船着岸仕候所、人数十四人いづれも廣東之漁夫之よしニ御坐候。右ニ付当國之向々之役人罷下リ筆談等仕候所、さして高才之者も無之、少々詩作等有之候得共、大かたハ一通之事ニ相見得申候。去十一月廿四日向々之役人相添崎陽迄相送申候。当国は右様之義ハ稀なる事ニ御坐候故、國中之老若罷下り見物仕候。久々逗留仕候事ニ御坐候へハ、華人も和人之言語ヲも聞覚へおかしけに物の名など申事ニ御坐候由承申候。私事ハ内外紛擾罷下リ不申候所、休節事ハ罷下リ、魚なと塩に漬候のをもらひ罷上申候。且

休節事も無別条家業相勤罷在申候間、是又御安心可被下候。心緒難申尽、早々如此申上候。猶又追便可申上候。恐惶謹言

佐藤意仲

正月廿五日

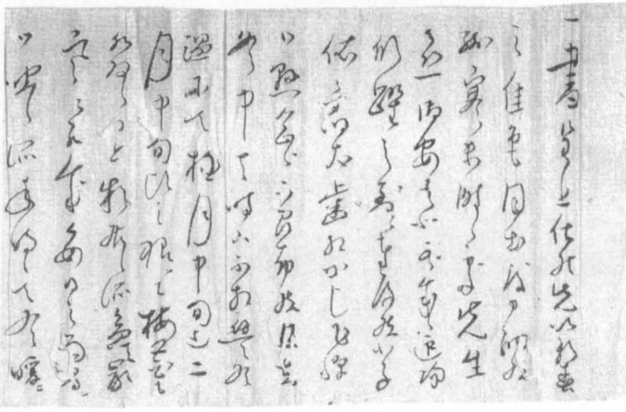
蒔田喜六様

副章

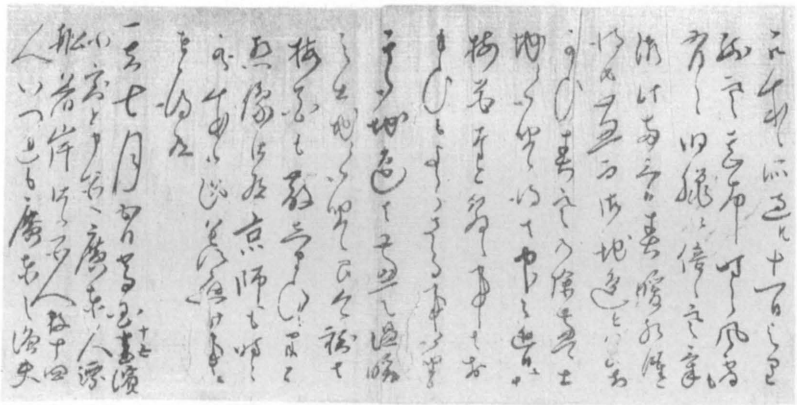
龍松氏[2]ハ別封さし遣不申候間、可然様御傳聲被下度奉頼候。以上

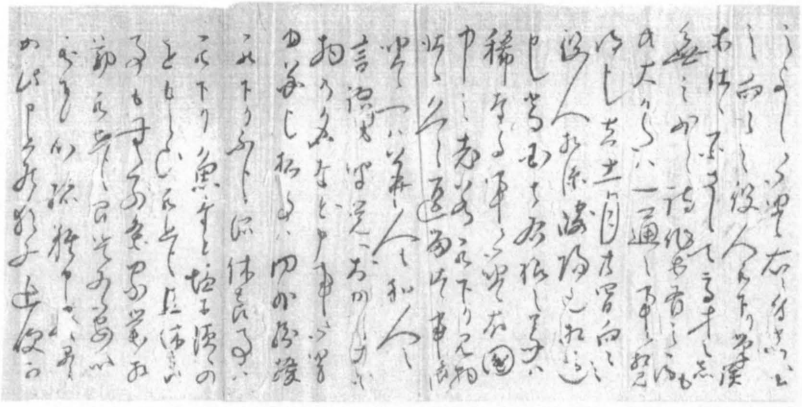
註1　現在の宮城県桃生郡北上町十三浜内の小室浜か。大槻玄幹編『続海外異聞』（文政十一年成）巻六所収の大槻玄沢録「広東漂船雑記」によれば、寛政八年六月七日仙台領本吉郡十三浜内の大室浜へ乗員十四名の広東漁船が漂着したとある。さらに同書は広東漁民と仙台藩儒志村時恭らとの筆談による問答や見物客の様子を詳細に記録し、同年十一月二十一日、漁民らを長崎へ護送したとする。十三浜には大室浜・小室浜等、十三の浜が隣接する。猶、『通航一覧』では漂着を同年六月八日としている。

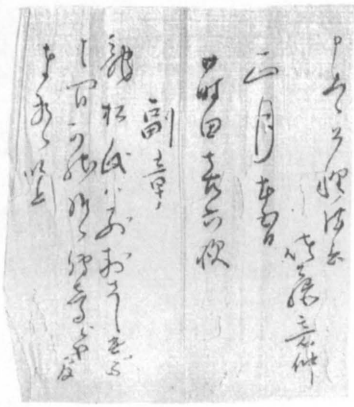
2　龍松愚園か。名正厚、字恒卿、号逸叟。蒔田必器の門人。書道に高名で、又詩文をよくした（『度会人物誌』）。また、書簡十五に見える安達清河編『嚮風草』第二編に「龍松正厚字恒卿勢州山田人」とある。



（149×1007mm）







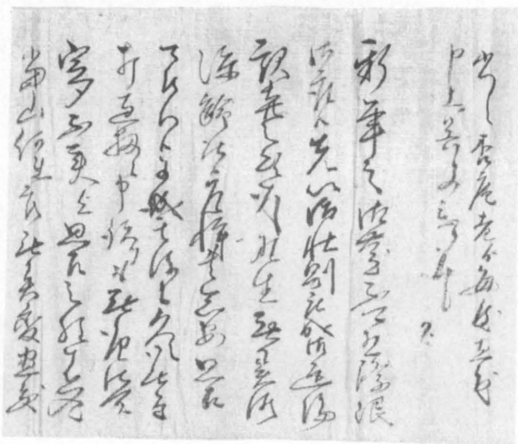
六　蘭溪

新年之御慶不可有際限御座候。先以御壮剛被成御迎陽、欽喜之至ニ存候。野生無異漸添齢仕候。乍憚貴意安思召可被下候。爾誠其後は久々御無筆打過、扨々申訳ケも無御座候間、定シテ不実与思召之程奉恐入候。當山何れも無異変宜敷申上呉との義ニ御座候。中ニも大人分テ宜敷との義、僧正様も去冬大僧正ニ被蒙勅許候。右之祝に而大分山内賑々敷御座候。少〳〵御上京被成ヌ歟、奉待候。尚期後喜時候。恐惶謹言

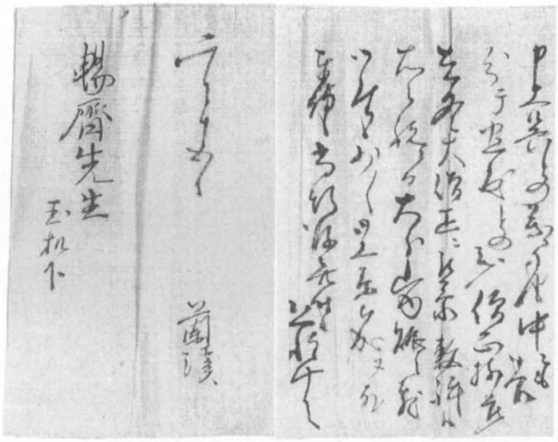
二月十五日　　蘭溪

暢齊先生
玉机下

尚々杏庵老より毎度宜敷申上呉との義ニ御座候。以上



（326×436mm）



七　千頭琢七

未接芳眉候得共、一翰啓上仕候。先以貴生益御壮健可被成御座、欣然之至奉存候。寔去年より春木氏[1]へ相頼御染筆之義御願申上候處、早速御許容御認被下、以御影千秋家蔵可仕与千々万々辱仕合奉存候。然者麁品ニ御座候得共、任有合硯一面進献仕候。御机下ニも被差置候ハヽ、本望奉存候。猶委縷期后便之時候条、先ハ右御謝詞、為可獲尊意、呈一書候。稽首拝手

千頭琢七[2]

繁躬（花押）

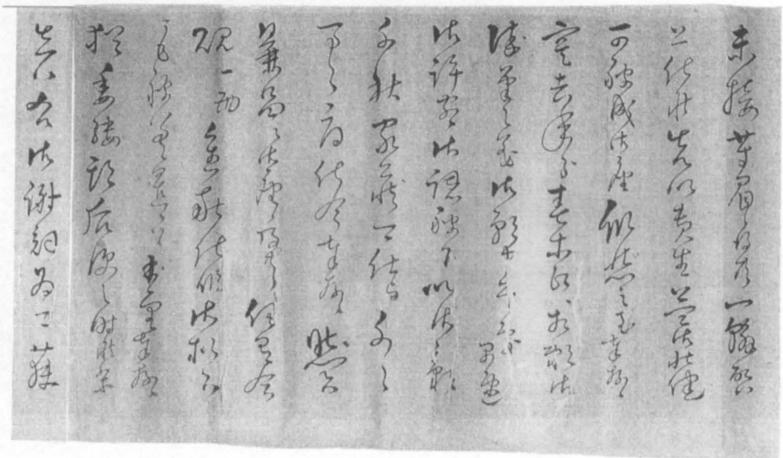
三月十八日

牧田喜六様

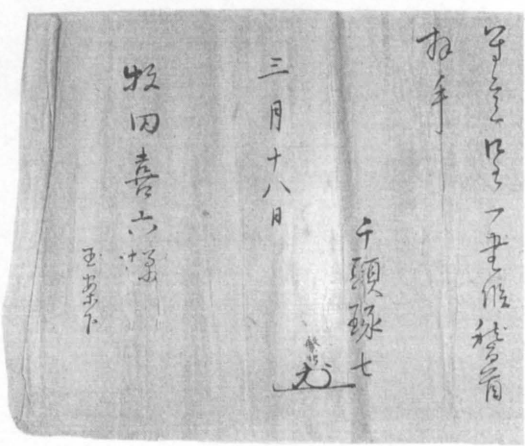
玉案下

註1　春木房光か。外宮権祢宜。亀田末昆の二男、春木寄光の養嗣。名末貞、号松圃、通称三郎五郎・隼人。伊勢田中々世古住。宝暦二年生、文化五年九月二十六日没、五十七歳（『度会人物誌』）。三村竹清「田必器」に、必器の門人中西伯圭が「春木房光の五男金之助といふ養子を迎へ」た旨が記され、その関係が窺える。

2　『本居宣長全集』第二十巻所収「授業門人姓名録　追加本」寛政六年の条に「土佐高知　家中　千頭琢七　菅原繁根」との記載がある。



(152×544mm)



八　辻喜一郎

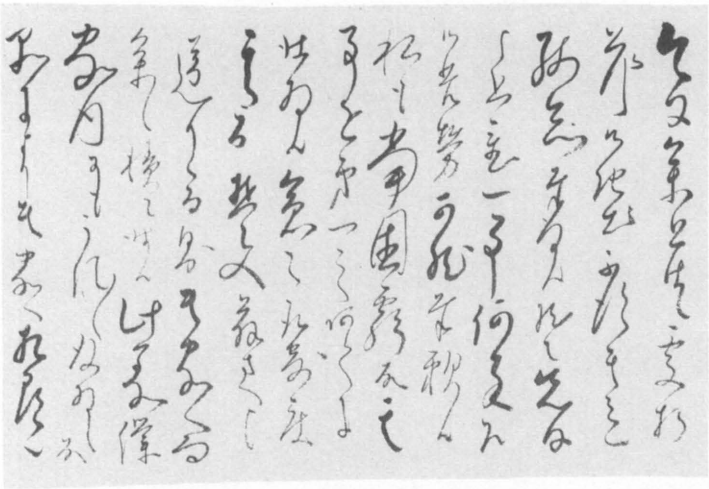
（端裏）蒔田喜兵衛様　九下

辻喜一郎[1]

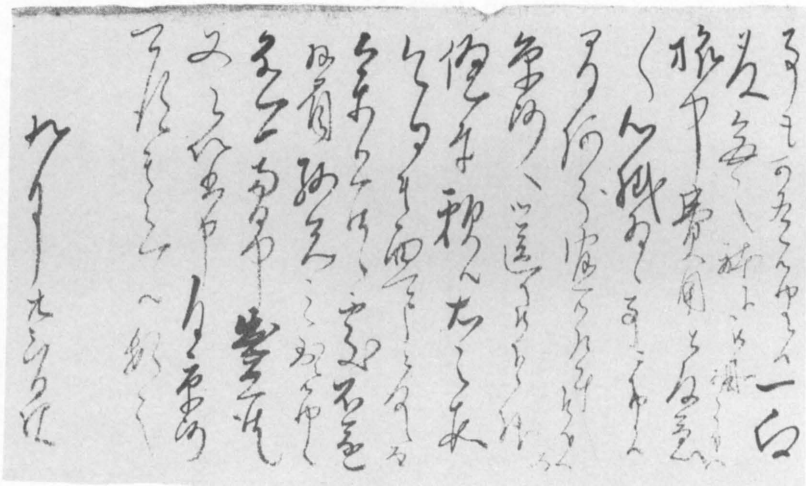
今日参上仕候處、折節御他出、不得貴意、残念奉存候。然者先日申上置一事、何卒乍御苦勞、可然奉頼候。私も當困窮故、其事を第一之あてに仕居候。兼〻取寄度、其ニ而、誓文翁方へ申送り候而、則貴家へ為参候積ニ仕候。此事家僕家内にもうす〳〵存居候故、品により貴家へ相尋候事も可有御座候。一向御存無之躰に被成可被下候。旅中費用と存、兼〻心掛居候事ニ御座候間、何分宜御取計被下候而、京師へ御送り被下候様、偏奉頼候。右之段、今日貴面可申候と存候而参上仕候處、不遂拝眉残念之到ニ御座候。愈一両日中出立仕候。又〻以書中自京師可得貴意候。頓首

九月廿三日夜

註1　蘭医。宇治山田の人。平秩東作『莘野茗談』（『日本随筆大成』新版2の24所収）には、「それより山田の手前にて御師と見ゆる男、手代らしき男を供に連れて跡先になり行ぬ。（中略）御坊は何方へと尋ける故、辻喜一という書生を尋ね侍るが、住處は宇治か山田か不〻存、幸の事承りたしといへば、それは山田なり。辻氏を尋給ふは杉田玄伯所縁の人なるべし。喜一東都へ行て、玄伯に随身して居りし。定てその節芳志に預りし朋友なるべし。僕は喜一の友にて扇館館太夫といふ者也」という記事がある。



（181×680mm）



九　辻喜一郎

幸便啓上仕候。追日春暖罷成申候。益御安康可被成御座、珍重奉存候。僕稲守事無事罷在候間、高慮安思召可被下候。御帰國之節者、未餘寒甚御座候。道中無御障被成御座候や。誠に此地にては数〳〵預御世話、千萬忝奉存候。御蔭を以杉田君[1]へ日々参上仕候而、薬事手傳、且会讀も致もらひ、追々蘭書の事も承申候。そんしよりとはまだ〳〵難事ニ而甚苦申候。併四五月も耳目になれ候ハヽとそんし出精仕候。公之御かけにて、年来の所望此度者相達し可申候。大喜仕候。旅宿よりかよひ申候而ハ夜分に承申事出来かたく候故、品にもより候ハヽ夏分には寄宿も仕度候間、御次手之節御状にて玄白子へ右之趣被仰入可被下候、奉願候。此間賊猫二疋生捕、解體仕候。甚以能分り、面白事共御座候。まことに千古の俗習をまぬかれ候事共、披雲霧出顕處心持仕候。玄白子之社中之者、公之御書致て懇望仕候而、何卒御苦労申上呉候様申候。天真楼[2]社中出精之者共へ、先生より、

時與人不游

右之文字書窓にはり置申候様、被申出候故、幸此文字行書草書御取ませ被成、四枚御認被下候ハヽ、千萬可忝候。三枚者社中懇望之者へ遣候。一枚者僕稲守申受度候。近比申上兼候へ共、達而懇望之者御座候間、何卒〻〻御認被下候様奉頼候。御認被下候ハヽ、稲守宅へ迄御遣し可被下候。何分〳〵奉願候。

東江先生[3]書会之日、推参仕拝見仕候。公之御事御噺御座候。

僕稲守事、此迄和書を好、その事而耳暮申候へ共、蘭書にかゝり候而は中〳〵和書ハ出来不仕候故、修行中ハ此事のみと心かけ居申候。廿五日は魚彦[4]方うた之会にて此へは達而と被申候故、出席仕候。此節方〳〵にて大分しる人出来、面白相成申候。追〳〵□事等御座候ハヽ可申上候。先ハ先頃之御禮申上度、如此御座候。恐惶謹言

辻喜一郎

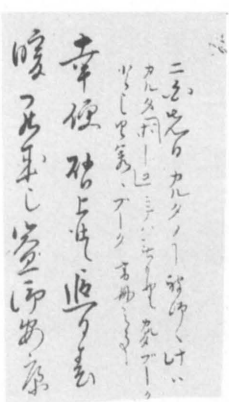
稲（花押）

正月廿九日

蒔田喜兵衛様

尚〻近比乍御面倒、玄白子へ一通御挨拶之御状被下候様奉頼候。

二白先日カルタノコト被仰候。此ハカルタ「ボーコ」ニテハ無御座候。カルタブークと申候由承候。ブーク書冊之事。

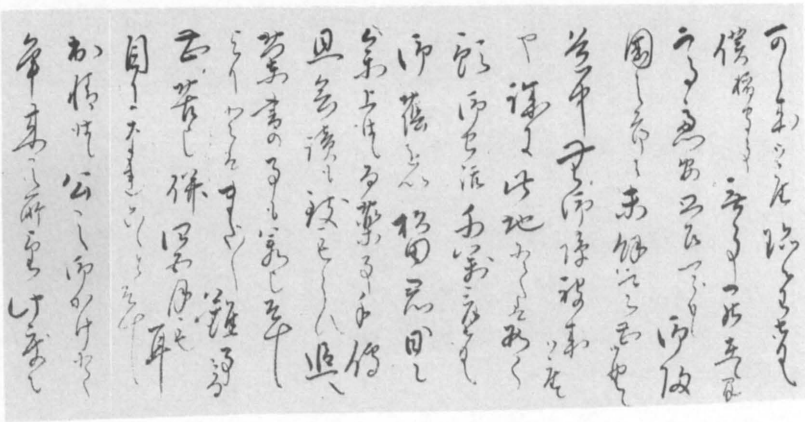


註1　杉田玄白。蘭医。享保十八年生、文化十四年四月十七日没、八十五歳。

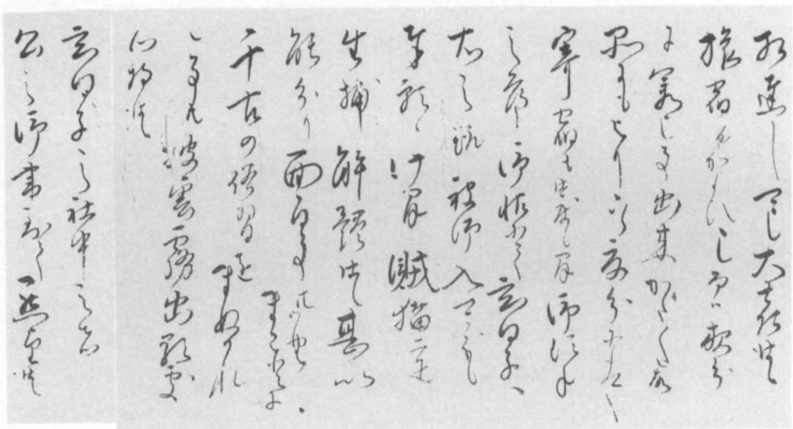
2　玄白の家塾名。

3　沢田東江。儒者・書家。享保十七年生、寛政八年六月十五日没、六十五歳。明和四年、山県大弐事件に連座し、以降「東郊」より「東江」へと改名。蒔田必器も東江に書を学んだ。

4　楫取魚彦。国学者・歌人。享保八年生、天明二年三月二十三日没、六十歳。賀茂真淵に学ぶ。明和二年、下総より江戸に移住した。

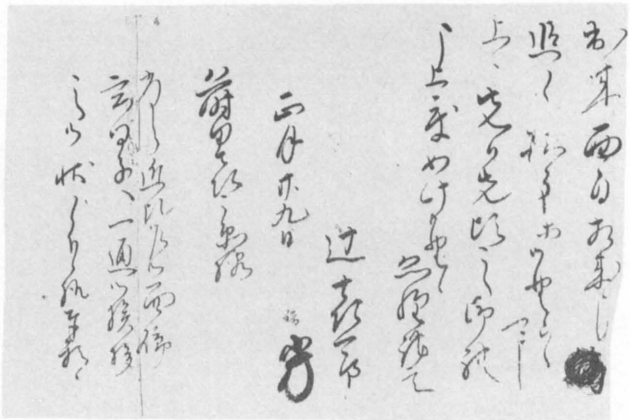


(153×1452mm)



時與人不游

十　［辻喜一郎］[1]



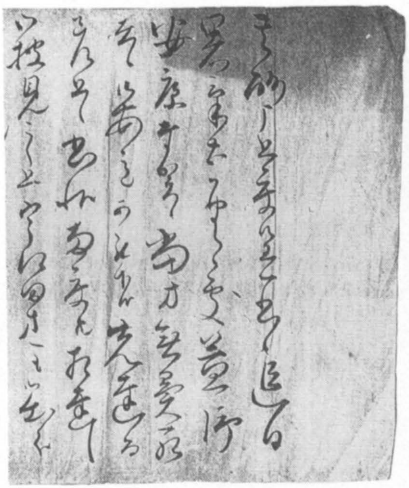
貴酬申上度呈一書候。追日暑気甚御座候處、益御安康奉賀候。當方無異罷在候。御安意可被下候。先達而差上候書状、両度共相達し、御披見之上、宇江田方へも御出候哉。御嗔説何角御厚情を以、親もほとけ候而、當年中は留り候様相成、喜申候。先日其御礼かた〳〵書状差上候。定而此節ハ相達し可申と奉存候。費用之事も御心添被下候。先達而も申入置候事御座候。近ころ申上兼候へ共、御序の節、又〻御説なため可被下候。只費用ニこまり入申候。外治道具、薬箱等こしらへ、甚こまり居候事御座候。御憐察可被下候。

一、東池方へ之御送り物忝かり宜申上呉候へと申居候。小楷[2]之方は環甚所望にて、無理にうはひ取申候。

一、備急之薬品承知仕候。追〻吟味仕、御出までに調置可申候。泊夫藍[3]（サフラン）之功能をば、シカ、トカームル[4]と申書にて翻訳仕置候。後便に入貴覧可申候。

一、南京漂船之願答書[5]、別紙入御覧候。則扇面之書ももらひ申候か、愚書にては御座候へ共、宜義唐なる處御座候。これは当秋可入貴覧候。

註1　書簡八・九との筆跡・内容の一致より辻喜一郎と判断。
2　細字の楷書。
3　「泊夫藍　ラティン語　サフラン」（『物類品隲』）
4　ウオイト編の医学辞書『医薬宝函』の蘭訳『Gozophylacium medico-physicum, of schat-kamer der genees-en natuur-kundige zaaken』。一七四一年初版。初期蘭学者によく知られ、『和蘭医事問答』所収安永二年正月の建部清庵あて杉田玄白答書に「〇ウッキトシカットカームル〈内外医法集成の書〉とある（鈴木広光氏示教）。
5　安永九年四月晦日、安房国千倉浦に南京船が漂着している（『通航一覧』巻二百三十二）。



（180×560mm）

十一　上妻宗雪

改歴之佳祥目出度申上候。尊公愈益御清晏ニ而被添亀年候む与奉遠察候。野拙並賤息、共ニ無障碍加駄年候。乍恐被碍貴慮間敷候。陳ハ先年拜謁之砌、鄭重御厚情之段難有候。晨夕も棄忘不仕候。且拜面之後、江都江着仕候而、暫馬喰町[1]ニ借宅致居候處、寒究此上なく、折節親好も有之候而、其冬、浅草三軒町[2]江罷越、醫道致シ候処、幸ニて往々其験有之候ニ付、只今ハ炮厨も相應ニ而月日送り居候。此段何條申上度候へ共、幸便無之ニ付、呈書不仕候。此段真平御海容可被成下候。賤息儀、此地江罷越候後ハ讀書無由断、且撃剣も心懸、野拙朝夕加心候。此段左様ニ思召可被下候。乍憚、上部氏様江も、御序之節御訊問奉頼上候。餘ハ繁緒、以再厂可申上候。猶又尊公御自玉専一ニ奉祈念候。恐々不具

上妻宗雪

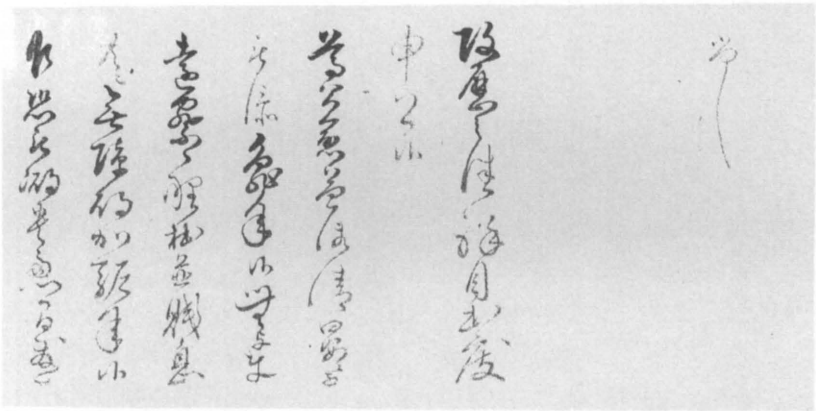
正月

蒔田亀六様

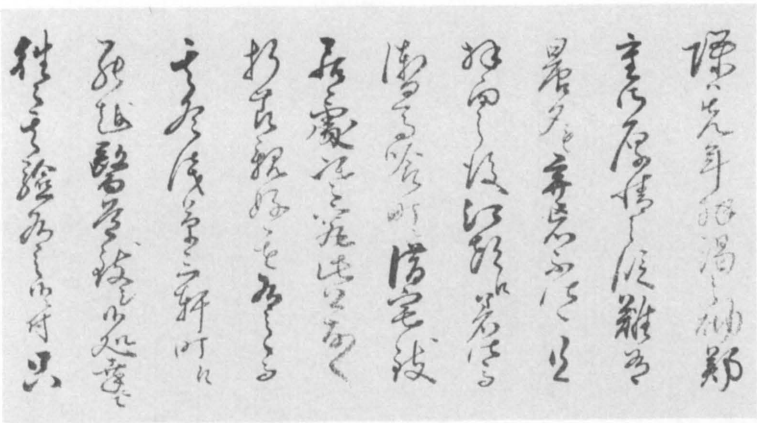
尚々

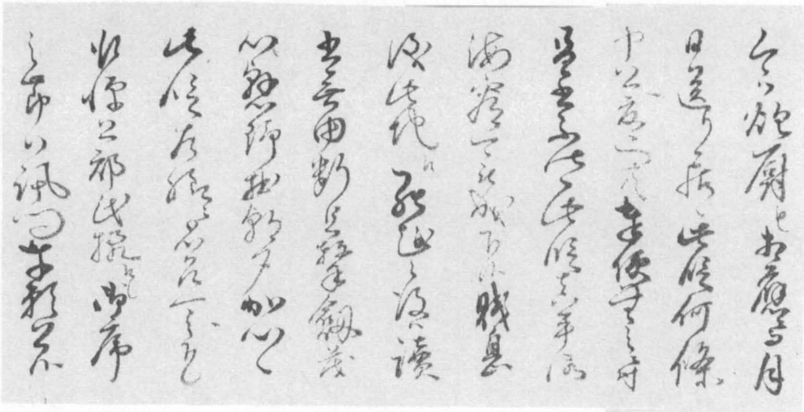
註1　現在の東京都中央区日本橋馬喰町一・二丁目。

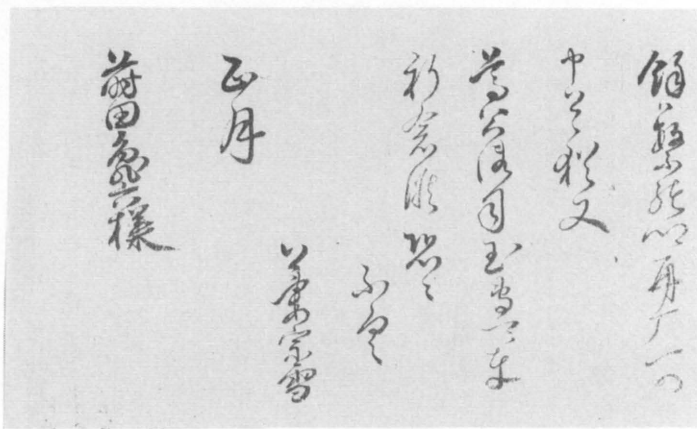
2　浅草三間町。現在の東京都台東区雷門一・二丁目、寿四丁目、駒形一丁目。



（154×1143mm）







十二　伊勢屋市兵衛

其後者御無音打過候。先以甚寒之砌ニ御座候得共、愈御荘栄可被成御座珍重ニ奉存候。隨而當方無難罷在候。乍憚御心易思召可被下候。然ハ此節澤山成品々候得共、水菜少々呈上申候。御笑受可被下候。折節ハ書中を以も御尋可申上候処、家事取込失礼已而罷過候。此段御用捨可被下候。日々寒気相増候。御自愛可被下候。右御見舞旁如此御座候。恐惶謹言

伊勢屋市兵衛

霜月廿八日

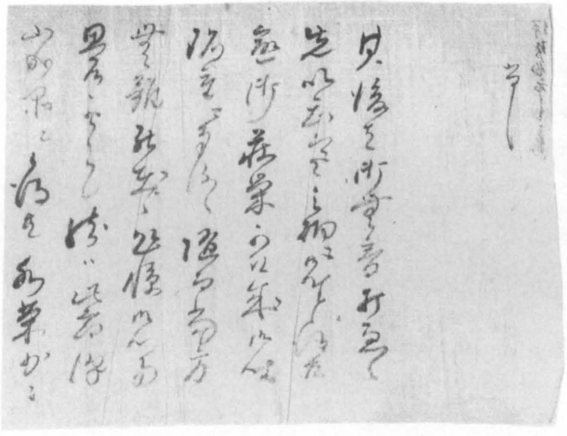
蒔田喜六様
尊下

尚々

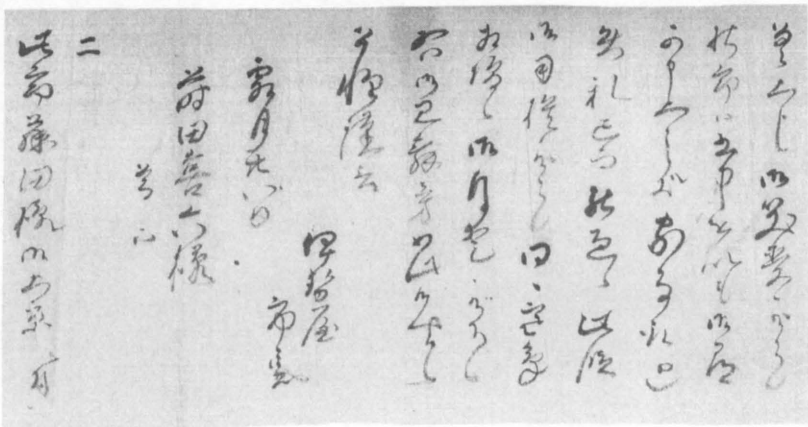
二

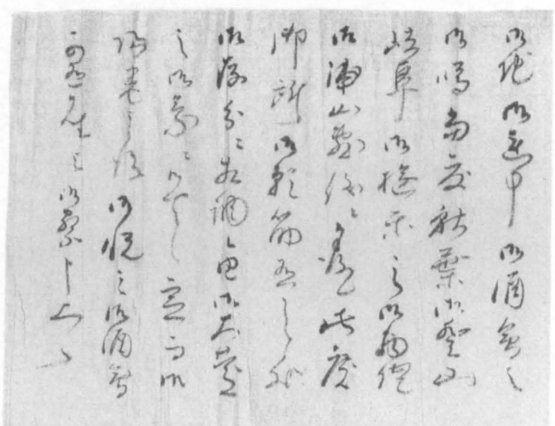
此節藤田様御上京ニ付御地御連中御酒會之御噂、當夏秋葉[1]御登山・岐阜御遊楽之御物語、御浦山敷儀ニ奉存候。此度御所御願筋有之候処、御存分ニ相調候由御大慶之御義ニ御座候。定而御帰着之後、御悦之御酒會可有御座と御察申上候。

註1　遠江国周智郡犬居村（現静岡県周智郡春野町）にある山。同山秋葉寺にまつられた秋葉山三尺坊大権現は火防の神として信仰を集めた。



（159×701mm）





十三　伊勢屋市兵衛

一筆致啓上候。追々秋冷相催候處、弥御勇健可被遊御座、珍重御慶奉存候。然者此間巻物御差圖之通り一文しや新

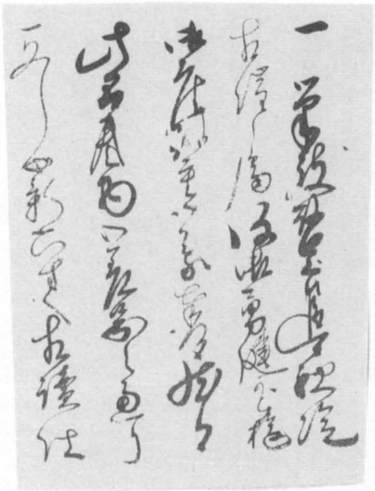
六方へ相讀仕、則三浦方ニ而仕立させ申候様仕候。右者御差直御座候へ共、三百疋ニ而者出来兼申候。五百疋と申事御座候處御尋申居候得者延引相成申上候間、金壱片ニ而相讀仕候。左様思召御承知可被下候。則一新殿方より三浦へ相頼申候。右申上度早〻如斯御座候。恐惶謹言

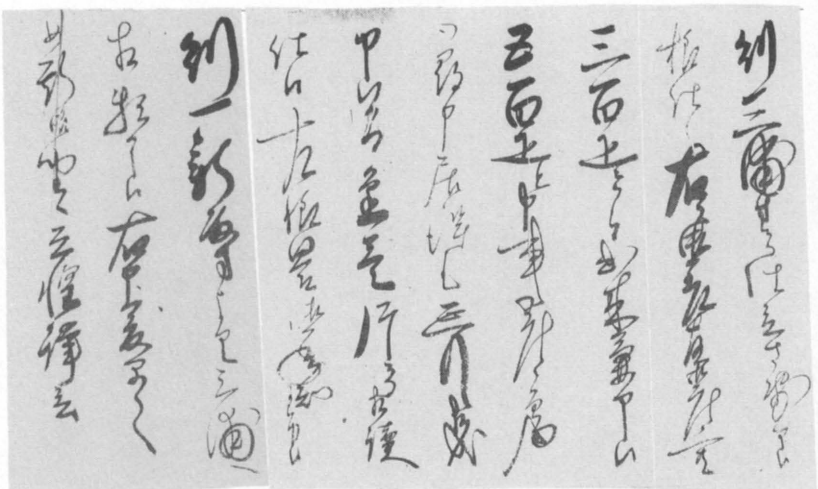
いせ屋市兵衛

八月十九日

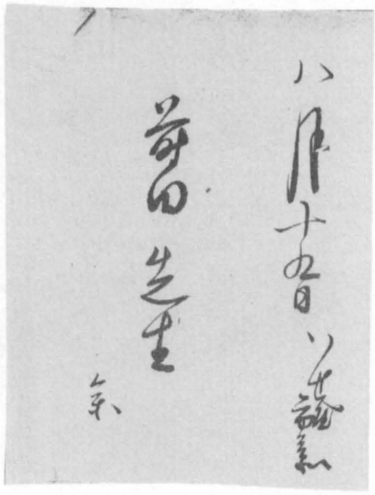
蒔田先生

参





（182×620mm）



十四　畑井旅麿

新春之嘉儀可賀候。愈無異愛度候。我等も無事加年可心易候。去冬之以文歳月之二大字七歳成手習始ニは宜候。悦餘有。不肖子には無之見得候間、精勤候へ。字も讀習へ。碁象戯は止而旦那様御能被遊候ハヽ少々習候へし。永春續而目出度可申入候。以上

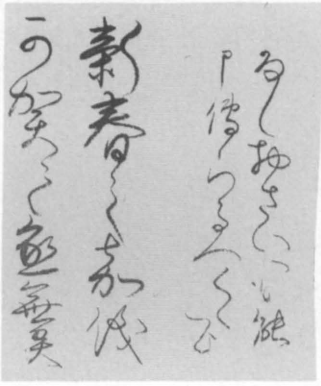
正月十三日　正（花押）

畑井理兵衛[1]

蒔田辰次郎殿[2]
旨

追而申入候。留貴上伯母様へも度々遊ニ可被参候。以上

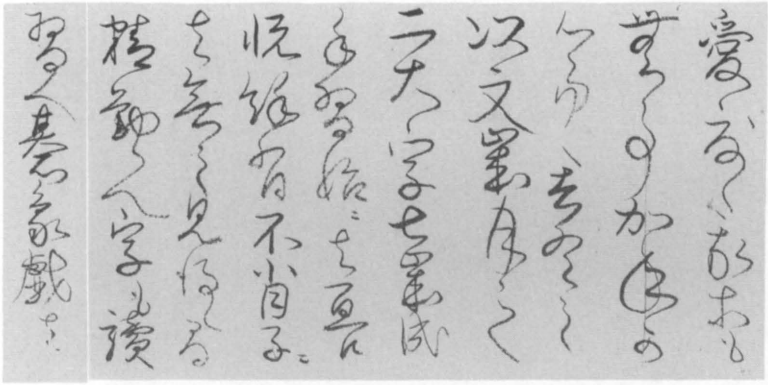
尚々おさい[3]へも能申傳らるべく候。以上



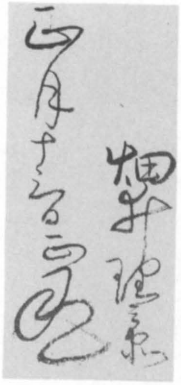
註1　必器の実兄。書簡四註3参照。

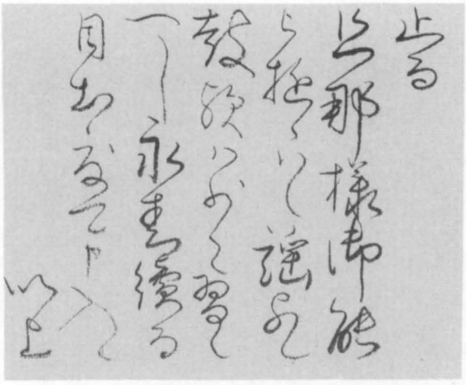
2　必器の次男。早世したという（三村竹清「田必器」）。

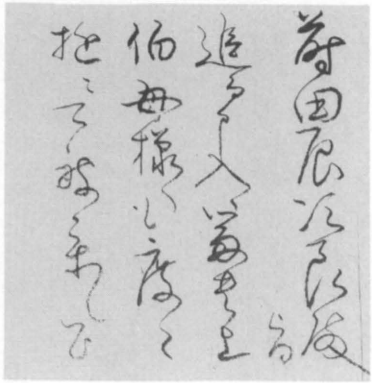
3　辰次郎の姉、幸か。必器の長女で蒔田家を継いで婿を取った。明和六年生、文政九年十一月朔日没。五十八歳（同右）。



（293×393mm）





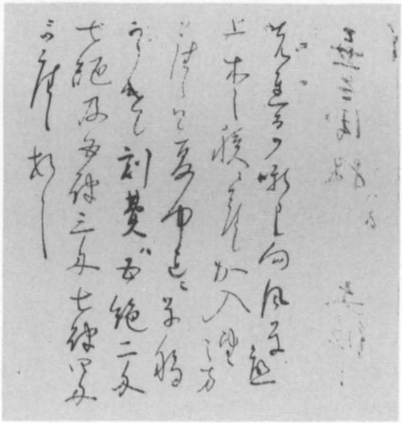


十五　安達清河

（端裏）喜兵衛様　　文仲[1]

几下

先達而御噺申候向風草[2]愈上木之積ニ御座候。加入望之方御座候ハヽ、夏中迄ニ草稿可被遣候。刻費ハ五絶二匁、七絶及五律三匁、七律四匁ニ御座候。頓首



（148×153mm）

註1　安達清河。下野の人。儒者・漢詩人。名は修、文仲は字。江戸で詩社市隠草堂を主宰。享保十一年生、寛政四年閏二月六日没、六十七歳。

2　『嚮風草』。初編は三巻二冊、明和七年序刊。二編は四巻三冊、天明四年刊。初編の外題・柱題は「向風草」とある。共に安達文仲刪定。伊勢の人としては、初編に「喬正」の七絶五首、二編に「西孝」の五律三首・七律二首・五絶二首・七絶三首、「龍松正厚」の五律二首・七律一首・五絶一首・七絶二首が見える。

十六　伊原左膳

（端裏）蒔田喜兵衛様　御報

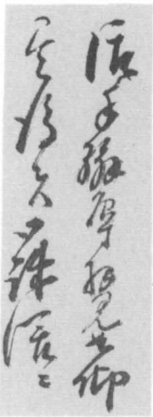
伊原左膳

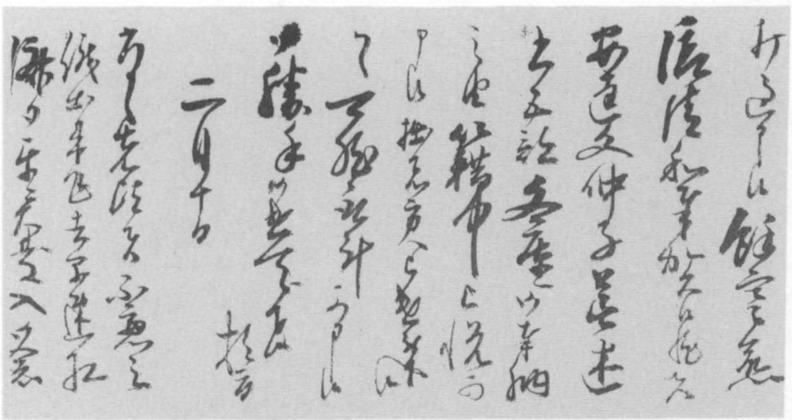
御手翰辱拝見、如仰其後者御疎濶ニ打過申候。餘寒愈御清和奉賀候。然者安達文仲子[1]著述書五部、文庫へ御奉納之由、籍中被悦可申候。拙者方へ被遣被下候ハヽ、可然取計可申候。御勝手御遣可被下候。頓首

二月十日

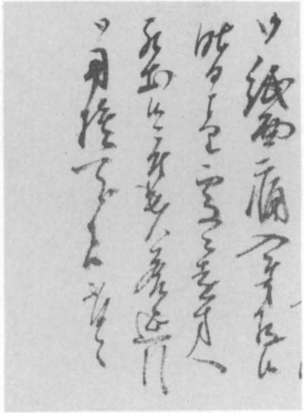
尚〻先頃者不慮之儀出来、乍去早速相濟、御互ニ大慶入御念候。御紙面痛入奉存候。昨日より處〻遠方へ罷出候ニ付、貴答延引御用捨可被下候。不具

註1　書簡十五註1参照。





（158×560mm）



有之候而もくるしかるましく候哉。不宜候ハヽ張紙被成、外之名前ニ御改可被下候。印判之事、京都手紙ニ何共無之候。惣而ヶ様之物ニ印形無之も多有之候。無印ニ而不苦と被存候。上野殿より、書面印ハ一枚〻〻ニいたし候様ニとの事と被存候。先此儘ニ而御登せ可然存候。御厨子へも宜御申被下度候。萬奉面上候。以上

廿一日

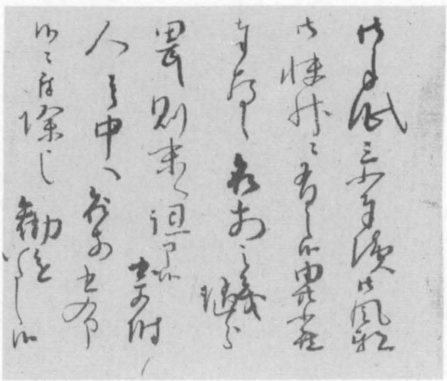
二白三両金御受取、御念入候御義、落手仕候。以上

次郎大夫

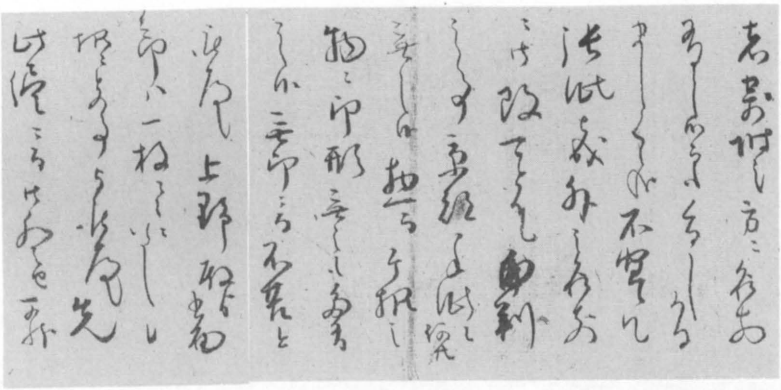
十七　次郎大夫

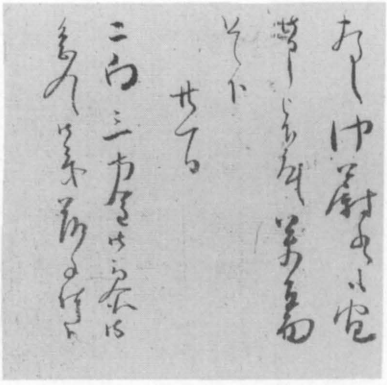
（端裏）喜兵衛様　几下

御手紙忝奉読、御風邪御快升ニ有之候由、恭喜奉存候。名前之義、随分畏候。則末へ認申候寄附人之中へ名前書入申候ニ付、除申候。勧進いたし候者、寄附之方ニ名前



（142×633mm）





［礎稿作製者］

飯倉洋一・井上敏幸・大庭卓也・樫澤葉子・勝又基・亀井森・川平敏文・康志賢・バーバラ　クロス・関澤智子・園田豊・高橋昌彦・田邉菜穂子・中野三敏・中村恵・盛田帝子・安永美恵